

## 親の期待がキャリア態度に与える影響

社会システム研究科

劉江 2015m30007

### 要旨

Driscoll (1972) は、恋人同士の間は何らかの障害が存在することで、かえってそれが二人の恋愛感情を高めてしまうというロミオとジュリエット効果を提唱した。恋愛の場合に限らず、キャリアの分野においても、進路選択の過程に親の期待と自分の理想が不一致である時、自分の理想を持っている大学生はもとの計画を断念せずに、親の反対が進路への気持ちを強めることもあるだろうか。本研究の目的は、自分が具体的理想を持っている場合に、キャリア選択においても親の期待と自分の理想が不一致の時、障害を乗り越えて目的を達成しようとする気持ちが高まるというロミオとジュリエット効果を検証することである。

キャリア分野でロミオとジュリエット効果を確認するために予備調査をした、その結果は、理想を持っている時、親に反対されたら、自信がもっと出てきたというロミオとジュリエット効果が見出された。

本調査では、大学学生の 90 名（男性 32 名、女性 58 名）を対象に具体的理想の有無（具体的な理想を持っている・具体的な理想を持っていない）と親の期待への影響（親の期待と一致、不一致する時の確信度・親の期待と一致、不一致する時の確信度の変化）について調査を行った。その結果は、具体的理想と関わらず、親の期待と一致する時、確信度が高まるというものであった。

将来に対して、親の期待が不一致であった人は親に反対された状況を想像したあとで、現実の問題に対して緊張感が大きくなる。その障害を乗り越えて目的を達成しようとする気持ちが高まるというロミオとジュリエット効果が出なかった。学生たちは親の期待と違っているという立場の想像を通して、親からサポートがなくなると、進路を選択して行く自信が低くなったといえる。

一般的に 12 歳～15 歳頃になると、青年は自己に関心を強く向けるようになり、自己の独自性、自律性の欲求が高まってくる。本研究で記入した調査対象の平均年齢は 19.6 歳であった、反抗期は終わっているはずの状態である。小高 (2008) の研究は、青年は最初、外面上の自立、独立を欲求したり、親に反抗したり、また親を無視したような態度をとることが多くなる。しかしやがて青年期も終わりに近づく頃には葛藤や緊張を解消するために新たな関係を親との間で築くこととなる。

ロミオとジュリエット効果の研究対象は結婚した夫婦と恋愛しているカップルであり、障害が存在することで、二人同士は互いの関係が密接で、深く依存しあう。反対された時、互い堅持の力を手渡す、互いに励ましあう、妥協せず一緒に関係を守る気持ちがある。大学生は進路選択する時に、人の助けを借りずに、単独で行動しなければならない、障害があった時に、その障害を乗り越えて目的を達成しようとする気持ちが高まるが逆に、自信

がなくなって迷ってしまうと考えられる。

バンデューラ (Bandura 1986) の研究に基づくと、楠奥 (2006) の研究によれば、我々が何らかの行動を起こす際、目標とともに、その行動をうまく成し遂げることができそうだという見通しが必要となる。うまくできそうだという自信がなければ、いくらその行動の結果が明らかなものであっても、その行動を遂行しようとはしない。自己効力感の四つ源泉は、遂行行動の達成、社会的なモデリング (代理的経験)、言語的説得による影響、情動的喚起である。進路選択する大学生としては、将来に初めて直面している。成功的な経験があまりなくて、成長の過程でうまくできない経験がある可能性が高く、遂行行動の達成しようという確立できない可能性も高い。先行研究を見ると、自分に似た他者が持続的な努力で成功するのを見ると、自分自身の可能性についての確信を強めることになる。大学生たちにとって一番近い人は親である、親の期待と不一致である時、親の成功経験は自分理想を守りたい気持ちに否定的な影響を与えるかもしれない。言語的説得とは、自己効力感を持った行為について、それが認められ励ましを受ければ、より努力をするようになる。親の期待と違っている時、励ますべきである親は冷たくあしらったりして、自己効力感を低下させる。情動的喚起のところで、自分では上手くできるかなと思っていた時、不安な気持ちになることはないだろうか。将来に対して、親のサポートを失う大学生たちは現実に直面して、不安な情緒がどんどん大きくなって、自分が立てた目標が達成できずに、どうせ自分にはできないんだと思い込んでしまう、思い込みを変えさせると考えられる。